

ま え が き

労働運動の現場指導を離れて、十年余になる。いまは、実践運動から一步、間を置き、変わらず、労働者教育に専心、労働組合や活動家の集会回りを続けている。

労働運動を生涯の仕事と定める決意をしたのは、四〇才を過ぎてからだだった。この決意から、パンフ一冊読むのも姿勢が、変わったように思う。

未だ、運動と関わりを持ち続けられることは、幸せと思い、「生き甲斐」として、歩き続けている。

昨年(1993年)は、80回余の集会に出た。全国歩きで、感ずることは、若者たちの受けた教育・環境・文化・市民生活のあり方等のせいだろうが、要求・価値感・関心の時代ギャップをマザマザと知らされる。

飢餓と貧困の中で、「生きるための労働運動」を余儀なくされた者と満ち足りた豊かさの中で、労働運動も「すべて、受け身で感ずるヤング達」との開きを強く感ずる。

「組合？関係ないんじゃない」「仕事と両立しないから」「組合費は高い」「ハチマキはダサイ」「専従者は多すぎる」「イメージはグレイ」「ストは駄目」「カンパはアカン」「賃金だけは満額とれ」と言う者も少なくない。

請求すれば、休暇・休日も、取れる。「賃金もある程度は・・・」。「組合も程々に付き合う」と言うのだ。

わたしが、私鉄総連の書記長に就いたのは、27才の時だったと思う。中央執行委員の平均年令は28才。賃上げ闘争・危機突破資金・一時金と闘争に追われ、労組法・労調法・労災補償保険法等、雇用保険法など、法律も無整備、夜学にも通った。ガムシャラ勉強もした時代だった。

積極的に労働運動に取り組みされた。今にして、思えば「励まされ」「責任を持たされ」「創意」「工夫」を強いられた世代だった。

今の「若者たち」との相違は？「なにか？」「チャンス」の「差」だけではないのか？。いまは、「若者だって、責任を持たして、やらして見ろ！」

「ちゃんとやれるのだから」と信じている。

若者を「子供扱い」して、「組合ばなれ」「脱政治」と言うが、「彼らに任したら、なにを仕出かすか？分からない」と決めているのではないのか？。

「若者」の、関心・価値感・ワイドな視点や要求に、運動のチャンネルを合わせようとしな。我われの側にも、問題があるのだと思う。

1946年（昭21）春、最初に、日本交通運輸労働組合同盟の執行委員会に出席、風呂に入って、戦前派の労組幹部たちが、体の傷を見せあって、留置場や刑務所での暮らし、拷問の事を話あっているのと出会い。

「沖縄沖航空戦」での数度の出撃で、38人の戦友の数人を残して、逝った友や、「自分たちの暮らし」とは、彼らは全く違った人生を送っていた。

「そんな人生もあったこと」を、眼のあたりに、見せられて、文字どおり「カルチャアショック」を受けたことを忘れない。

夜半までの会議、翌朝、8～9時に、もう、昨夜の記録が整理されて机上にある。

この実務能力の凄さに驚嘆した。ワープロも、ファックス・ゴピーもない時代のことである。高等小学校卒ばかり、「監獄は大学だった？」と思わせるものがあつた。

考えて見れば、このショックが私の47年間の労働運動入りの動機づけだったのかも知れない。組合書記を探していると聞いて「会社を辞めるので、2～3月ならー」と引き受けてなつたのだから。

いま、労働運動は、若者に、「どんなショックを与えているのか？」。運動が活性化しないで、組織の拡大も強化も望めない。

彼ら「若者」と時代ギャップを感じたときは、「労働組合は全労働者を組織出来ないもの」と割り切ること。「あの頃と比べて、俺も随分変わった」。「自分が変わったことを信じられるから、人を変えることに賭けよう」と、自分に言い聞かしている。

いまは、私鉄総連・観光労連労働学校の顧問とJTBU「日本交通公社労働組合」の専任講師の仕事を手伝わせて貰っている。この組合（JTBU）

と付き合っ、て、「人間を相手の仕事をしている所為か?」。自前の運動をつくる真剣さと、努力には、教えられるものが多い。常に、考え、前向きに歩む組合で、好きな組合の一つである。

先年、この組合の「分会役員ノート」―職場役員の仕事―①分会役員のチェックポイント②職場の世話役活動③会議の成功法④話のコツ・のパンフレットを書いた。

今回、その許しを得て、団体交渉のテクニック・未組織の組織化・組合員との話し方・団交と労使協議制・ストライキの教訓などを加えて『私の体験的組織論』として、実務書を整理して見た。

団体交渉も、ストライキも経験していない。「労働組合を作ったらどこへ届けたらよいか?」と言う、リーダーも増えている。

新任の組合リーダーたちの日常活動の参考にとし、筆をとる事とした。

視野も狭く、戦略、戦術のない「戦力論」で、穴掘り的なところ、重複した所も少なくないが、『労働組合屋』と言われる私の欠陥を、各位の教訓で、行間を埋めて頂ければあり難い。

今でも、私は、『労働運動には、先生でだけである組合はないし、生徒でだけある組合もない。お互いが「先生であり、生徒だ」。とりわけ、仲間たちの闘争から学ぶ』という言葉が好きだ。

現役時代、スト解除・「一番出庫」の運転士の「顔」を「ご苦労さん。気をつけて」と送るのが好きだった。いつも、「これが本物の労働者の顔だ」と思うからだ。

「彼らが少しでも、今よりましな生活ができ、人間らしく生きられるなら俺は・・・」と思いを新たにした。

これからも、今の仕事を続けることが出来たら幸せだと思ふ。そのためには、「呆けた」「マンネリ」と言われないよう、職場の若者との結びつきを大切に生き続けたい。

1993.12.30

内山 光雄